



第130号

2019年6月1日発行

千葉大学教育学部  
同窓会  
〒263-8522  
千葉市稲毛区弥生町1-33



### 創意工夫で課題解決を 変えることを恐れずに

同窓会記念誌編集委員長 大塚昌男 (S39・3卒 千葉市)

○前例がない。だからやる  
○うまくいかなかったら元に戻せばいい

○職場は楽しくなければいけない  
○存分にやらせてもらいました。ありがとございました。

これらは、校長になった時から念頭に置いていた考え方である。

「前例がないだからやる」は、銀行マンから業績不振だったアサヒビールの社長になり、賞味期限二か月前になった商品は回収して捨てさせるなど、「アサヒビールは美味しい」という評判を得て、業績を回復させるまでの顛末を書いた樋口廣太郎氏の著書名である。

我々は、学校経営にあたって、とかく前例に倣うことが多いが、それでは学校が変わらない。校長が、自分の教育観や課題意識に基づいた経営をすることが大切だと思ふ。

私は、学校四週六休制が始まった時には、二週間を一サイクルとする教育課程を編成した。また、放課後の諸活動を五十分、週二十五コマ（通常は二十八コマ）の教育課程を編成・実施したこともある。

その際、「うまくいかなかったら元に戻す」という覚悟さえしておけば、新しい試みすることに、なんら躊躇することは無い。

そして、新しい試みをする時、教職員が「よし、やるう」という雰囲気になつていことが大切で、楽しい職場づくりになり腐心した。

最後の言葉は、離任の際、このように言ってきた言葉である。

今、学校は、新学習指導要領への対応や教職員の長時間労働など、様々な課題を抱えているが、校長は教育課程の編成をはじめ、多くの権限を持っている。失敗したら元に戻せばいい。思い切った学校経営をしてほしいものである。

◆◆◆◆◆  
教育学部創立百五十周年を記念する同窓会記念誌の編集に携わることになった。百周年以降の同窓会の活動の足跡をまとめる重要な事業であるが、編集委員と楽しく仕事をしたいと思つている。



尾瀬の夏

### 紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいき だより	4・5面
私の学園生活	7面
卒業を迎えて	8面
海外教育施設から	9面
我が学舎の今昔	9面
現役の学生から	10面
支部だより	10面
新入生の声	11面
事務局より	11面
物故会員	11面
同窓生の美術館	12面

### 教育学部の組織の変遷

黒川弘氏に三部にわたり教育学部の変遷について記していただいた。昨年度本学部で大きな組織改革があったので、今回、「百年史」や「学部要覧」を参照し、今までの流れを記しながら紹介したい。

昭和四十年（一九六五）、小学校教員養成課程と中学校教員養成課程（国語科専攻・社会科専攻・数学科専攻・理科専攻・音楽科専攻・美術科専攻・保健体育科専攻・技術科専攻・家庭科専攻）の定員が改定され、養護学校教員養成課程が新設された。

四十二年（一九六七）、小学校教員養成課程の教科分野（国語科・社会科・算数科・理科・音楽科・図画工作科・体育科・教育原理学・教育心理学）に選修制が導入された。

四十三年（一九六八）、幼稚園教員養成課程が設置された。

四十四年（一九六九）、特別教科（看護）教員養成課程が設置された。

五十一年（一九七六）、養護教諭養成課程が設置された。

六十年（一九八五）、特別教科（看護）教員養成課程が廃止された。

平成六年（一九九四）、スポーツ科学課程が新設された。

十一年（一九九九）、生涯教育課程が

新設、中学校教員養成課程の再編成と増設が行われた（自然教育・技術教育Ⅱ数学科、理科、技術科、生活・社会教育Ⅱ家庭科、社会科、言語文化教育Ⅱ国語科、英語科、芸術教育Ⅱ音楽科、美術科、身体教育Ⅱ保健体育科、情報教育、教育基礎）。

十九年（二〇〇七）、小学校教員養成課程に次の選修が（総合教育選修、教育心理選修、もの作り・技術選修、異文化コミュニケーション選修）が加えられた。また、中学校教員養成課程に、教育基礎が廃止され、総合教育、教育心理が設置された。

二十年（二〇〇八）、養護学校教員養成課程が特別支援教育教員養成課程と名称が変更された。

二十七年（二〇一五）、幼稚園教員養成課程に保育士養成が開設された。

二十八年（二〇一六）、スポーツ科学課程、生涯教育課程、中学校教員課程の総合教育、教育心理、情報教育の学生募集が停止された。

三十一年（二〇一九）教員養成五課程（小学校教員、中学校教員、特別支援教育教員、幼稚園教員、養護教諭）から学校教員養成課程の一課程に改組された。

課程として、七コース（小学校、小中専門教科、中学校、英語教育、特別支援教育、乳幼児教育、養護教諭）に改組された。

(文責 古山文夫)

挑戦するひと



高谷 昌 則

(H13・3卒 印旛地方)

アムステルダム日本人学校で理科、数学を教えることになり、一年が過ぎようとしている。

オランダの国内には、八百を超える博物館、美術館等の施設がある。日本で採掘された鉱物や採取された動植物が、大切に保管されており、四百年を超える日蘭交流の歴史を感じる事ができる。

子供たちが休日、博物館や美術館の様々なイベントに参加できるように整備されており、子供を大切に育てるオランダの一面を見ることが出来る。そのため、各学

年の校外学習では、子供たちがオランダの文化や歴史を理解するた



佐渡金山由来の鉱物

めに、体験活動や現地交流を実施している。

オランダの教育では、一人一人の子供たちが、いずれは社会の中でどういう役割に就くのか、時間をかけて選択できる制度になっている。

現地の上級学校に進学する生徒もいるため、授業をする上で、改めて教材研究の重要性を感じている。義務教育の生活科、理科を系統立てた指導を通して、理科や数学が、どのように社会に役立っているか、という視点を持てるような指導を心掛けています。

現地で購入された教材や備品も多く、オランダ語のマニュアルを読み解いて使用する。消耗品の多くも、現地で購入するため、銅の酸化・還元の実験準備をするだけでも、オランダならではの学びにつながっていると思う。

「自分も学びながら、子供たちに教えていく」。

教員生活の折り返し地点を過ぎたが、初心を忘れることなく、これから自分がすべきことを模索し、国際社会に飛び立つ子供たちの手助けをしていきたいと思う。

我が学舎の

今昔(四)



サークル室

宮葉 清子

(S50・3卒 千葉市 同窓会報編集委員)

「戦争中から使用のオンボロ木造校舎」「二階で歩く音が聞こえた」「床は土ぼこりが舞い、壁は汚なかった」「兵舎だったから、破傷風の注射をした方がいい」と言われた」等、昭和四十年代のサークル室の様子。

当時は、食堂裏の旧五号館と呼ばれた教育系の棟(①)、工学部の北、薬学部東にあった棟(②)、理学部北で体育館の近くにあった運動系・音楽系の棟(③)があり、いずれも老朽化した木造二階建てだった。

③は、四十六年九月に火事で燃え、①も五十二年八月に焼失。

現在は、①の場所に文化系のサークル棟(三階建)、ラグビー・サッカー場北の奥に運動系と音楽系等の二棟が並んでいる。いずれ

も明るい外壁の二階建てである。約百六十のサークルがそこで活動し、部員は学生生活を充実させている。



①の跡地の現在の文化系サークル室



③火事直後の運動・音楽系サークル室



現在の運動・音楽系サークル室



# 同窓生の美術館



遠い日 (風まつ日)



濱田 清

(S45・3卒  
千葉市)

誰にでもある子供時代。その遠い日の記憶を絵のモチーフに選んだのも遙か遠い日になってしまった。確か一枚目の絵は、冬の陽

だまりに枯草だけを描いた記憶がある。陽だまりだけが暖かかった原風景、少し寂しい絵である。人は何故絵を描くのか。その自問とともに、少年の日に感じた漠然とした不安や恐れは、六十年以上を経た今も続いている。最近つくづくと思うことは、絵を描くことに何を求めてきたのかということである。それは当然、自己実現を図ることに尽きるが、ややもすると最も大切な表現主題が希薄になることがある。その様な中、想像を絶する自然災害や社会的

シヨックに直面すると、絵を描くことの意味や表現すべき内容が鮮明になる。今回掲載の遠い日「風まつ日」は、東日本大震災後に制作し、国立新美術館で開催された第六十一回一陽展に出品した作品である。復興への願いを鯉のほりに、白い椅子にレライエムの思いを込めて表現した。

## 編★集★後★記

今年一月野田市で小学四年女児が、虐待を受けて亡くなり、社会に大きな衝撃を与えています。児童福祉法改正や親の体罰禁止の法制化が進められています。情報化社会の発展と、地震や風水害、火山噴火等の自然災害の多発という平成時代から、新元号「令和」となり初の会報発行です。

今回の特別寄稿は、あさひ少年少女合唱団の指導者である高木智子先生にお願いしました。その中に、佐治薫子先生が音楽監督の千葉県少年少女オーケストラとの共演の様子が綴られていましたので、第二百二十七号の佐治先生の特別寄稿を再読しました。同窓生が連携し、県内での音楽活動を通しての被災地の激励や国際交流等、子供たちの育成や地域貢献に尽力されているお姿に感服いたしました。

同窓生の美術館に、教え子も私自身も大変お世話になった濱田先生の絵画が掲載でき、嬉しく思います。

今回より編集委員を務めることになりました。よろしくお願い致します。不安な気持ちで、西千葉駅からキャンパスに入ると、タイムスリップし、心も足取りも急に軽やかになります。(文責 小笠原真理子)